

まち や
京町家の生活文化を
今に伝えて

—— 町家に息づく暮らし・心・言葉



杉本 節子さん

(財団法人奈良屋記念杉本家
保存会事務局長)

プロフィール

京都市生まれ。生家である杉本家住宅（京都市指定有形文化財）は寛政130年の京町家。平成4年にその維持保存のために設立された財団法人奈良屋記念杉本家保存会の事務局長を務める。京町家の四季や暮らしをつづったエッセイを雑誌などに多数連載し、著書に『京町家の四季』（樹林社）がある。

京都文教短期大学卒業後、大塚あべの辻調理専門学校に学び、その後フランス料理研究家に就き、京の食文化を考える活動も行い、小学館ホームページに、生家に伝わるおばんざいを紹介する「節子の番豆巻」(<http://sanpozuki.jp/column/setsuko/>)を連載中。父はフランス文学研究者で蘭学家の杉本秀太郎氏。

260年続く京都の商家に生まれ育った杉本さん。代々大切に守られてきた京町家に今も家族と暮らし、建物とともに受け継がれてきた町家の生活文化を守り伝えていきます。町家に寄せる想いや京都のもてなしの心、人とのつきあひ方の心得、またライフワークのひとつとなっている執筆活動から得た気づきなどについて伺いました。

町家の生活文化をもてなしの心で伝えたい

財団法人奈良屋記念杉本家保存会事務局長という肩書きをお持ちですが、どんなことをされているのですか？

生まれ育った家が、130年ほど前に建てられた京町家で、平成2年に京都市の有形文化財に指定されました。その2年後に、財団法人を設立し、建物と、そこで受け継がれてきた杉本家の生活文化を継承保存し、多くの方にその一端を見ていただけるよう公開事業などを行っています。「奈

良屋」というのは、江戸時代に初代が呉服商を創業した当時の屋号です。

京都は文化都市であると同時に観光都市でもあります。神社仏閣に比べ、町家の文化的価値の認識、保存は遅れてきました。その維持保存は修繕や改築に費用がかかり、相続税の負担も重いために、これまでに多くの町家がビルやマンションなどに姿を変えていってしまいました。最近では町家ブームということで、住まいとしても見直されています。取り壊さずに店やギャラリーなどに再活用する例が増えています。

しかし、ブームはいつか去るものですし、外観は残っても、本来の家

杉本家住宅

杉本家は江戸中期に「奈良屋」の屋号で呉服商を創業。現在の母屋は明治3年（1870年）に創始されました。京格子、虫籠窓など典型的な京町家のたたずまいを残し、町家としては京都市内最大規模。京都市指定有形文化財。祇園祭では、町内の山鉾のひとつ、「倍牙山」のお飾り場となります。

現在、財団法人奈良屋記念杉本家保存会によって維持保存されており、会員以外には非公開ですが、春（雛祭り展）、夏（祇園祭の屋敷飾り）、秋（特別企画展）などは一般公開もしています。

【問い合わせ先】
同保存会（☎075・344・5724）



京町家の四季
杉本節子

杉本さんの著書
『京町家の四季』
（展覧社）
杉本家に伝えられる生活文化や年中行事とともに、京都で暮らす日々の想いがつづられています。

として住まうことがなくなれば、そこに息づいてきた生活文化も簡単に忘れられてしまいます。

杉本家の場合は、全国にいらっしやる保存会の会員さんに支援していただいています。その家なりの守り方というのがあるように思います。

——杉本家として守ってこられた建物、その中で大切に受け継がれてきた生活文化といえますか？

ひとつは江戸期の京大工の仕事の素暗らしさですね。そして、単に見るだけでなく、「たたずまい」というものを五感で感じていただけたらという気持ちがあります。

また、訪れる方を杉本家の客人として迎え入れ、心地よい時間を過ごしていただくことを心がけています。そのため季節の花を生け、軸をかけ、念入りに掃除をし打ち水をして、お迎えします。

京商家では、ハレとケ、つまり非日常と日常の生活の線引きが明確でした。ハ

レというのは雛祭りや祇園祭など、特別な年中行事のことです。けれど訪ねて来られる方はハレの日に来られるとは限りません。ケの日に来られた方には、町家が持つ質素儉約の精神についてお話します。例えば、座敷の欄干には普段はほりや自然焼けを防ぐ専用の被いがかけてあるなど、手に入れたものをかけがえないものとして大切に、暮らし続けていることを知っていただきたいのです。

京都では質素儉約することを「始末する」と言ったりしますが、京商家の暮らしの根底にある「分相応」という精神を表す良い言葉やと思います。

人つきあいにも 京都人の智恵

——「いちげんさんお断り」、「京のぶぶ漬け」といったような言葉もあって、京都には排他的なイメージもあり

ますが。

確かにそういう面もありますが、それは京都に限らず、都であり観光都市である町に暮らす人の特性ではないでしょうか。都は大勢の人が出入りするところですから、用心しないと自分の命にも関わります。ですから、誰でもすぐに受け入れるわけにはいかないと、感覚が今も残っているのではないかと思います。

かといって、外部の人を全く拒絶しているというわけではありません。いわば薄皮を一枚一枚はがしながら、コミュニケーションを深めていくやり方なのです。相手のことを少しずつ知り、またこちらのことも相手に知らしめていく、そうした用心深さが人間関係を築く上でのマナーであるという心得が京都人にはあるのやと思います。

それが外から見ると、冷たく感じられたり、わかりにくかったりするのかもしれないですね。

文章をつづることで 自分と対話する大切さ

――財団の活動の二環として、本や雑誌の執筆などもされていますね。

成人してから、京都や町家について文章を書く機会を与えられるようになりました。それは町家と自分との関わりあいを整理する上でとても重要な作業であると思っています。

他所の方は、町家に暮らすことに憧れを抱かれるようですが、私にとつてこの家は町屋である以前に生家だという意識が強くなります。父は九代目の当主ですが、家業は継ぎませんでした。とはいえ、この家には先祖が築いてきた呉服商としての歴史とともに、そこで営まれてきた代々の家族の物語もあります。その延長上に存在する自分の内面には生まれ育った町家を重苦しく感じる部分もあるのです。同時に町屋の生活文化を守り伝えていかなければ、という思いもあり、生家とどう関わって

いくのかということ、一生の課題であるように感じています。

しかし、文章を書くことによって、自分がどういう道を進んできたのか、また進んでいこうと思っているのかが、整理され、自分と向かい合えるようになってきました。自分の中においてくるさまざまな感情や葛藤を整理し、自分の進む道筋を明らかにしてくれるという効用が、文章をつづるという行為にはあるように思います。特に自分を中心にして文章を書く場合は、自分の過去・現在・未来という3つの次元から眺めつつ、書き進めます。そうして自分と対話することが、人との対話の第一歩であるという気もしています。

――子どもの頃から、読書や文章を書くことは好きだったのですか？

本を読むのは好きでした。父が研究者、随筆家であるということもあり、壁一面が本という環境で、童話や伝記、古典文学、特に日本やギリシャの神話が好きでよく読んでいました。

けれど、作文や読書感想文を書くのはあまり得意ではありませんでした。今になって考えると、きっと何のために書くのかわからなかったのだと思います。読書感想文も、登場人物の人生に自分の人生を照らし合わせることで、自分の将来の人生設計を考える勉強になると気づいていれば、もっと好きになっていたかもしれません。

子どもの頃の環境についていえば、私の場合は、やはり町家で生まれ育ったことが文章を書く上でも大きな財産となつていきます。町家には坪庭や座敷庭があり、街中にいながら自然の移り変わりを感ずることができます。自分ではよくわからないのですが、私の文章は四季の表現が豊かやと褒めてくださる方もいます。もしそうだとしたらそれは、四季によって変化する陰影、春には新芽が芽吹き、小鳥が飛んできてはさえずる……、そうした自然を建物に取り込んだ先人の智慧から、いただいた大切なものやと思っています。